

日本に住む中国朝鮮族の多言語使用の管理 —コードスイッチングにおける留意された逸脱の分析—

高 民 定・村 岡 英 裕

キーワード：多言語使用者 コードスイッチング ネットワーク 言語管理 接触場面

要 旨

日本に在住する中国朝鮮族は朝鮮語、中国語（普通話）、日本語を日常的に使用することが知られている。本稿では、コード選択またはコードスイッチングに焦点をあてながら、多言語使用者としての彼らの言語使用の実際を明らかにすることを目的とする。調査の結果、朝鮮族同士のネットワークでは、コードスイッチングは機能的であったが、その他の3つのネットワーク、つまり、日本に在住する中国漢民族とのネットワーク、韓国人とのネットワーク、日本人とのネットワークにおいては、コードスイッチングに対する逸脱の明瞭な留意が見られ、言語管理の対象となっていることが明らかになった。朝鮮族のコードスイッチングに対するさまざまなタイプの留意と言語管理は、彼らが個々のコミュニケーション場面をどのように認知するかによっていると考えられる。

1. はじめに

グローバリゼーションの拡がりとともに、日本にも多様な言語環境が発達しつつある（cf. 真田・庄司 2005）。とりわけ、従来は日本語非母語話者と呼ばれてきた多言語使用者の存在が注目されている。多言語社会あるいは単一言語社会出身の外国人居住者の多くは、日本語も含めて彼ら自身の言語レパートリーの多様なリソースを、意図的に利用することで、日本においてさまざまな社会活動に参加していると考えられる（高・村岡・石田・ファン 2007）。こうした多言語を使用する外国人居住者の中でも、3万人から5万人¹とも推定される中国東北部出身の中国朝鮮族（以下、朝鮮族とする）は言語使用の点で興味深い。日本に居住するこれらの朝鮮族は朝鮮語²を第1言語³とし、中国語（普通話）⁴を第2言語、そして日本語を第3言語として使用するが、英語能力は一般に低い。本稿では、日本に住む多言語使用者としての朝鮮族の言語使用の実際を、彼らの言語選択およびコードスイッチングの管理を通じて、明らかにすることを目的とする。

2. 日本における朝鮮族コミュニティと言語環境

漢民族が90%⁵を占める中国において、朝鮮族は55少数民族の1つとして認められている。人口は約200万人で、その大半が中国東北部（黒竜江省、吉林省、遼寧省）に居住しており⁶、特に吉林省には延辺朝鮮族自治州（または延辺自治州）が設置されている。朝鮮族の日本への移動は、中国政府が始めた海外との交流を促進させる開放経済政策下の80年代後半にさかのぼる。朝鮮族が日本を定住の場所として選択した理由はいくつか考えられる。両国の地理的な近さのほかに、彼らの日本語能力が大きな要因となっている。金（2004）が指摘するように、日本語は日本留学の重要な文化リソースとして見なされてきた。戦前の日本支配下で日本語で教育を受けた年配の朝鮮族以外にも、中国東北部では多くの若い世代が中学校から第1外国語として日本語を学習してきた。またそこには朝鮮語と日本語の言語的な近さも日本への移動を促進する要因として働いていると考えられる。

朝鮮族の多言語能力については、個人の言語背景によって各々異なるため、一般化することはできないが、彼らが日常生活において3言語を併用する多言語話者である可能性は十分に認知できる。実態調査の報告（権・宮島等2006）によると、日本に居住する朝鮮族の家庭領域での最も一般的な言語使用のパターンは、3言語の混用であることがわかっている。その他、朝鮮語のみ、朝鮮語と日本語、朝鮮語と中国語、中国語と日本語といったパターンが報告されている。本調査でも権・宮島等（2006）と同様の使用傾向が見られている。つまり、日本にいる朝鮮族は多くの場合、朝鮮語を基底言語としつつも、日常的に3言語を使用していることが示唆されるわけである。

他方で、朝鮮族以外のネットワークで形成される社会領域および交友領域においては、さまざまな理由によってどの言語を使用し、どの言語を回避するかを意識的に選択していることも本調査では調査協力者から報告された。言い換えると、彼らの参加する接触場面においては、言語選択およびコードスイッチングに対する言語管理（cf. Neustupný 1994）が行われていると推測される。

本稿では、日本に居住する朝鮮族が言語選択およびコードスイッチングを通して3言語の使用をどのように管理しているかに焦点を当てる。とくにコードスイッチングに関して彼らが留意する逸脱（3.3で詳述する）を観察することにより、日本における多言語使用者としての朝鮮族の言語問題の一端を明らかにしたいと思う。

3. コードスイッチングと言語管理

本節では先の目的を達成する上で重要な先行研究および研究の枠組を、コードスイッチング、およびその言語管理に分けて述べることにする。

3.1. コードスイッチング

バイリンガル話者や多言語話者の言語使用に関しては、言語コード間の切り替えのさまざまなタイプに言及するために、言語選択 (language choice)、コードスイッチング (code-switching)、コード混交 (code-mixing)、借用 (borrowing) などの用語が用いられてきた (金 2006、Baker 1993)。Baker (1993) は、コード混交とコードスイッチングの違いについて、コード混交は語レベルでの切り替えをいうときに使われるのに対し、コードスイッチングは、2言語をある程度意図的に使い分けるときの交替を説明するのに使われるとしている。大原 (2004) は、「言語選択」と「コードスイッチング」は、本来なら異なったコンテキストで使用される用語であるとしながら、言語選択とコードスイッチングがともに「ことばを選び取って切り替える」行動と見なせることから、便宜上両者を含む形を「コードスイッチング」と呼んでいる。本稿でも大原に従い、コードスイッチングを言語使用者の言語規範に基づいて言語を選択したり変更したりする言語行動とする。

3.2. コードスイッチングの機能

コードスイッチングの機能については多くの研究があるが、ここではおもに第2言語習得、社会言語学、バイリンガル研究について取り上げる。

第2言語習得研究において、コードスイッチングは、言語能力の不足に対する補償のためのコミュニケーション方略と見なされる (e.g. Hoffman 1991)。例えば、Sing and Backus (2000) では移民について、吉田 (2005) では韓国人日本居住者について、滞在期間と移民先の目標言語の能力との関係に焦点が当てられている。

言語選択に関する初期の社会言語学的研究においては、コードスイッチングの要因、例えば参加者、状況、話題、内容などが考察されたが、最近では、コードスイッチングの有標性・無標性のパターン、コードスイッチングとその言語の流暢さなどとともに、そのコミュニケーション機能に関する研究が中心的である (Myers-Scotton 1997)。そうした研究としては、例えば、Gumperz (1982) による “we-code” と “they-code” の区別があげられる。しかし、Gumperz 自身述べているように、バイリンガル話者や多言語話者の観点からコードスイッチングを理解するためにはこうした区別では説明できないことが少なくない。例えば、本調査でも、朝鮮族の調査協力者は家庭領域であっても、朝鮮語 (we-code) と日本語 (they-code) を頻繁に選択している。

バイリンガル研究でも、コミュニケーション方略的な機能とともに、バイリンガル話者間の談話における二言語使用を仲間意識やアイデンティティ意識を示す機能から取り上げている (Nishimura 1997)。さらに、Auer (2000) では、話題提供、話題転換、引用などの談話関連機能、また参加の統制・批判などの参加関連機能が提案されており、ナカミズ (2003) では話者の考えや感情をより明確に表現するための「話し手内面表示」機能が示唆されている。

これらの研究にあげられた多様なコードスイッチングの機能は、大まかに次の4つに分

類することが可能であると思われる。

- (a) 命題的機能またはメッセージ伝達機能 (e.g. 言語能力の不足を補償したり、効果的な説明を目的としたコミュニケーション方略、引用などの談話機能)
- (b) 語用論的機能 (e.g. 強調、感謝、助言などのコミュニケーション・アクト (cf. Hymes 1972))
- (c) 自己表示機能 (e.g. 親密さの表示や人間関係の距離の表示)
- (d) 社会機能 (e.g. アイデンティティなどの社会的帰属の表示)

本稿では、朝鮮族に見られるコードスイッチングを以上の分類に従って記述していくこととする。

3.3. コードスイッチングにおける言語管理

Neustupný (2005, 1994, 1985) は、ポストモダン社会の言語問題を考察する上で規範は最も重要な概念であると述べている。規範とは、あるコミュニケーション場面において参加者によって「適切」と見なされる言語使用の規則を指す (Neustupný 1985:162)。通常のコミュニケーションにおいて、このような意味での規範は言語選択や言語表現の生成に際して適用される規則として観察される。バイリンガル話者や多言語話者は会話の中で無意識にコードスイッチングを行うことが多いが、彼らにとってコードスイッチングは、コミュニケーションの調整のためであるというより、彼らの言語環境や言語使用の規範に基づく言語生成そのものである可能性がある。

他方で、当事者の少なくとも一方が言語選択や言語使用の点で「不適切な規則」を認知したときには言語問題が生じていると言うことができるだろう。コードスイッチングに関しても、こうした言語問題が調整された結果使用される場合や、その使用が回避される場合が考えられる。言語管理理論 (cf. Neustupný 1994) は、言語問題をある場面のプロセスに位置づけ分析する枠組であるが、それによると最も単純なプロセスには、その場面の規範からの逸脱、逸脱の留意、留意された逸脱の評価 (肯定的あるいは否定的)、調整の計画、そして調整の実施、という5段階があり、各段階にさまざまな言語問題を考えることができるとする。具体的には、言語管理理論でいう「規範からの逸脱」とは、コミュニケーションを行う上で参加者の (言語) 行動が当事者によってその場面の基底と見なされる規範から逸脱することを、さらに「逸脱の留意」は、その規範からの逸脱が少なくとも参加者のどちらかの規範により、留意されることを意味する。ただし、規範からの逸脱がすべて参加者によって留意されるわけではなく、留意されない場合もある。また、ネウストプニー (1997) は、留意は必ずしも意識を伴うものではないとしている。受身の形がなんとなく作りにくいという気持ちなども留意になるとしている。言語管理プロセスでは、以上のような留意された逸脱も含め、次のような段階を踏むとされるが、すべての段階で管理が起こるわけではなく、実施まで進まず、途中の段階で終わってしまう場合もある⁷。

逸脱 (deviation) の段階：コミュニケーションを支配する規範 (norm) から逸脱が起こる

留意 (noting) の段階：規範からの逸脱が留意される

評価 (evaluation) の段階：留意された逸脱が否定的に（あるいは肯定的に）評価される

調整 (adjustment) の段階：評価された逸脱に対し、調整計画が立てられる

実施 (implementation) の段階：調整計画が実施される

規範を出発点とする言語管理理論を採用することにより、適切な規則の現れであるコードスイッチングの機能を分析するだけでなく、コードスイッチングが生ずるまでのプロセスに現れる不適切さ（逸脱の留意）を分析する上で、有効な枠組を提供してくれると思われる。

日本に居住する朝鮮族の調査協力者（以下、KC とする）のコードスイッチングについて本調査で顕著であったことは、コードスイッチングに関する逸脱の留意はおもに参加者のネットワークに影響を受けているということである。Gumperz (1982) が指摘するように intra-group（内的場面）と inter-group（接触場面）では KC の管理意識に違いが見られる⁸。つまり、内的場面に相当する朝鮮族同士のネットワーク (KC-KC) においては、コードスイッチングに関する逸脱の留意はほとんど報告されなかったが、その他の接触場面、つまり日本に居住する朝鮮族と中国漢民族（以下、HC とする）のネットワーク (KC-HC)、韓国人（以下、KK とする）とのネットワーク (KC-KK)⁹、そして日本人（以下 JP とする）とのネットワーク (KC-JP) では明らかに逸脱の留意から始まる言語管理が報告された。

本稿では、第4節で調査の概要を述べた後、第5節で内的場面として KC-KC ネットワークをまずとりあげる。KC の内的場面においてコミュニケーションの規範となっているコードスイッチングがどのような機能を持っているかを分析する。第6節では、接触場面におけるコードスイッチングの逸脱の留意を KC-HC、KC-KK、KC-JP のネットワークごとに分析し、日本に居住する朝鮮族の言語問題のいくつかを明らかにする。

4. 調査の概要

4.1. データ収集

本稿で扱われるデータは、対面式の半構造化インタビューによって行われた8つの事例研究に基づいている。朝鮮族の調査協力者はすべて日本に居住しており、朝鮮語、中国語、日本語の運用能力がある。

インタビューでは、日本における様々なコミュニケーション領域での言語使用の概要を質問した後、インターアクション・インタビュー（村岡 2002）を行った。インターアクション・インタビューはいわゆる1日調査と言われるものであり、具体的な言語行動の報告を体系的に収集することができる¹⁰。本調査では、インタビュー当日から1週間分の言語行動について報告してもらい、その後、それぞれのコミュニケーションにおいてコードスイッチングが行われたかどうかを問い、行われた場合にはさらに詳細な場面の説明を求め、そのときの

意識や逸脱の留意を聞いていった。さらにこの1週間に限らず、コードスイッチングについて具体的なエピソードがある場合にはそれらもまたデータとして収集した。

インタビューは次節で述べる KC1 から KC5 まだが 2006 年 2 月から 4 月、KC6 から KC8 まだが 2008 年 5 月から 6 月にかけて、それぞれ調査協力者の都合を優先して 2 時間から 3 時間をかけて実施された。調査時の使用言語については、まず調査者が使用可能な言語を提示し（韓国語¹¹と日本語どちらか）、調査協力者にどちらかを使用言語とするかを選んでもらった。その結果、今回のインタビューでは、8 名の調査協力者に対し、韓国語ないしは日本語が使用言語となった。また、インタビューの際、調査協力者により中国語や中国朝鮮族の間で使われる朝鮮語の語彙などが使用された場合は、韓国語や日本語で確認を行った。インタビューは許可を得て、すべて IC レコーダーにより録音された。

4.2. 調査協力者のプロフィール

調査協力者 KC の背景を下の表にまとめる。すべて中国東北部から来ており、そのうち 7 名は 5 年以上、日本に滞在している。KC8 は例外的に短く、滞在期間 1.3 年であった。調査協力者の選定に当たっては事例研究として、できる限り多様な背景を持った KC を選びたかったが、結果的には 8 名中、2 名が主婦で、残りの 6 名は留学生となってしまう、データに偏りがあると言わざるを得ない。しかし、インタビューの中では社会人やアルバイト先でのネットワークについても言及されることが少なくなく、首都圏に居住する朝鮮族について一定の傾向は反映されていると判断した。また、今回の調査では多言語を日常的に使用していることを重視しており、言語ごとの能力については詳細には問うていない。

表：調査協力者（KC1～KC8）の背景

	性別	年齢	出身地	滞在年	日本での家族構成	身分
KC1	女	30 代前半	吉林省(延辺自治州)	5.8 年	2 人(本人、配偶者 KC)	留学生
KC2	女	20 代後半	吉林省(延辺自治州)	5.6 年	2 人(本人、妹)	留学生
KC3	女	40 代前半	黒龍江省(哈爾濱)	10.1 年	3 人(本人、子供 2 人)	主婦
KC4	女	30 代前半	吉林省(延辺自治州)	6.9 年	2 人(本人、配偶者 HC)	主婦
KC5	男	30 代後半	吉林省(延辺自治州)	10 年	2 人(本人、配偶者 KC)	留学生
KC6	女	20 代後半	吉林省	6.6 年	2 人(本人、配偶者 KC)	留学生
KC7	女	20 代後半	吉林省	5.3 年	2 人(本人、姉)	留学生
KC8	女	20 代半ば	吉林省	1.3 年	1 人(本人)	留学生

インタビューから調査協力者の 3 言語の能力および言語バイオグラフィーをまとめてみる。上記の 8 名の KC は朝鮮語を母語として、高校卒業まで正式な学校教育の言語として学習しているが、報告からは朝鮮語の言語能力について個人差が予想される。中国語も小学校から共通語として学習が始まったが、中国語能力、学習期間、使用頻度はさまざまであ

る。また、日本語に関しては7名が中学校から第1外国語として学習を始めていた。例外はKC3で、来日後、ボランティア日本語教室で初めて日本語を6ヶ月間学習し、それ以降は独学である。中学校から日本語を学習し始めた7名のうち、KC2、KC4は大学においても第2外国語として日本語を学んでおり、KC8は大学で日本研究を専攻していた。KC3とKC8以外の6名は、来日後も日本語学校または入学した大学で日本語の学習を続けていた。

5. KC-KC ネットワーク（内的場面）におけるコードスイッチング

KC に対するインタビューから、KC-KC ネットワークにおいてコードスイッチングは文レベルでも談話レベルでも自然なことであることが報告されている。特に注目したいのは、8名すべてから、そして特に延辺自治州以外の出身者からは、コードスイッチングをせずに特定の言語コードで一貫して話し続けることが困難であるという報告がされたことである。つまり、KC のコードスイッチングは、彼らの言語使用の規範の一部であり、言語機能を実現するためのリソースの1つであると考えられる。

本節では、こうした前提に基づき、コードスイッチングの機能をまとめる。

5.1. 命題的なコードスイッチング

(1) 効果的に説明する（朝鮮語→中国語）

先述したように、3言語の能力はKC間でばらつきが見られるが、詳しい説明や効果的な説明が必要な場合には朝鮮語から中国語へのコードスイッチングが役立つことが報告された。たとえば、KC1は朝鮮族の配偶者に対してビザの申請書への記入の仕方について中国語に切り替えて説明したとの報告があった。KC1によれば中国語の方がずっと効果的ではっきりと説明できるという¹²。また、KC4は議論をするときには朝鮮語から中国語に切り替えたほうが有利になると報告している。

(2) 日本・日本人に関連した内容の表現（朝鮮語・中国語→日本語）

調査協力者は特に日本の習慣や社会に関連した単語や名前、そして日本で新しく学んだ話題については、日本語を使用しようとするのが報告された。

例えば、KC3は、朝鮮族の友人に自分の病気のことを話していたとき、朝鮮語から日本語に切り替えたことを報告した。それは自分の病気のことは日本に来てから初めて知ったし、病院に行ったのも日本が初めてだったからだと述べている。日本語への切り替えのもう1つの例は、精確な情報を提供したいと考えるときに行われた事例である。KC4は朝鮮族の友人に銀行の場所を教えようとしたときに中国語から日本語に交替した。KC4は日本語の単語や表現を用いた方が、より精確に銀行の情報について伝達できると述べている。

以上のように、日本社会の文脈に埋め込まれた固有名や概念、日本で習得された語彙等が必要となる場合には日本語への切り替えが行われる。

5.2. 自己表示的なコードスイッチング

(1) 人間関係の距離を縮め、親密さを増す（中国語・日本語→朝鮮語）

すべての KC が一致して同意したことは、朝鮮語を選択することによって、朝鮮語でコミュニケーションをしない朝鮮族の知り合いより、人間関係の距離が縮まるということであった。KC5 は同じゼミに出ている朝鮮族の学生と初めて会ったとき、相手が朝鮮族であることを知りながらも、最初は日本語で話をしたことを報告している。しかし、その学生と親しくなっただけからは、さらに親しみを示すために朝鮮語で話すことが多いと述べている。KC1 も朝鮮語で話した方が友人関係を維持しやすいと報告している。

(2) 人間関係に距離があることを示す（朝鮮語→中国語・韓国語・日本語）

KC1 と KC5 は、上の場合とは逆に、あまりフレンドリーではないように見える朝鮮族に対しては朝鮮語ではなく、日本語で対応したいと思うと述べた。ここでの日本語の使用は、相手との距離を保つように機能する“they-code”の規範として考えることができる。

また、何人かの調査協力者は初対面の朝鮮族に対しては、朝鮮語には複雑な敬語体系があり不適切な敬語形式を選択して間違えたくないの、朝鮮語で話しかけることを回避すると報告した。KC1 によれば、中国にいる友人の朝鮮族に電話するときにも、意識して中国語で話すそうである。また KC6 も初対面の時は、敬語の不適切な使用が気になるので、中国語に切り替えることが多いと述べた。

5.3. 語用論的なコードスイッチング

(1) 強い感情を表出したり考えを強調したりする（中国語→朝鮮語）

考えや感情を強調する必要があるときには朝鮮語への切り替えが行われることがある。KC2 は朝、妹を起こすときに中国語から朝鮮語に切り替える。KC2 によると、彼女は妹が自分の話を聞かず、できる限りベッドにいたいことを知っているので朝鮮語に切り替えて強調すると言う。

(2) 感謝を示す（日本語→中国語）

誉め、謝罪、要求などのコミュニケーション・アクトを実施する場合に、KC はしばしば中国語への切り替えを行うと言う。KC4 は日本語の携帯メールで朝鮮族の友人や中国漢民族に感謝を表そうとするときに日本語から中国語へと切り替えることを報告している。KC4 は、日本語の「ありがとう」は決まり文句であり、彼女の気持ちを十分に表現するのに十分ではない。また、日本語の携帯メールでは朝鮮語はカタカナ表記でしか表すことができないが、中国語は漢字表記ができるため、より気持ちを表せると述べていた。

(3) 修辭的要素を加えたコミュニケーション・アクト（朝鮮語→日本語）

KC8 によると、不満を述べたり、助言をしたりする場合には朝鮮語よりも日本語を使う方が容易な場合があると報告した。例えば、KC8 は韓国のソウルに住む姉に電話をしたとき、日本語も理解できる姉に向かって「もっと大人になりなさい」と日本語で伝えたと言

う。KC6 もまた夫に何かお願いをするときには朝鮮語よりも日本語で行うほうが「効果的」であると報告した。つまり、外国語にコードスイッチングすることで、コミュニケーション・アクトに特別な修辭的要素が加わるのであり、暗喩的コードスイッチング (Gumperz 1982) の事例の1つと考えられる。

5.4. 社会的なコードスイッチング

(1) 内的ネットワークにおけるアイデンティティの維持 (中国語→朝鮮語)

先述したように、すべての KC にとって朝鮮語は第1言語と考えられており、アイデンティティとの関連が少なくない。日本に居住する朝鮮族の中には朝鮮語で読み書きをする機会が少ない場合もあるようである。KC2 は、朝鮮語表記の能力を維持するため、また彼女が属している社会へのアイデンティティを維持するために、母親に電子メールを送るときには意識的に朝鮮語を使用していると報告した。

(2) 外的ネットワークにおける「中国で使用する朝鮮語以外の標準的な言語変種」の使用 (朝鮮語→中国語または韓国語)

延辺自治州出身の調査協力者の場合、その他の地域出身の朝鮮族とコミュニケーションをするときには延辺朝鮮語から中国語または韓国語へのコードスイッチングが優先されることが報告された。つまり、彼らは自分たちが使う朝鮮語は特殊であり、延辺以外の出身者とは他の標準的な言語である中国語や韓国語を使用した方が適切だと信じていた。

以上のように、日本に居住する KC 同士の内的場面において、朝鮮語は第1言語とみなされるが支配言語ではなく、朝鮮語、中国語、日本語の混交コードが基底言語コードとして使用されている。さらに、コードスイッチングは、コミュニケーション問題のために選択される調整ストラテジーであるよりも、むしろ命題的機能、自己表示的機能、語用論的機能、社会的機能などの重要なコミュニケーション機能を担っていると思われる。

6. 接触場面におけるコードスイッチングの管理

朝鮮族以外の相手とのコミュニケーションの場面は、理論的には、接触場面と呼ばれ (注8を参照)、程度の差はあれ接触性 (ファン 2006) が観察される。こうした接触性は当事者の一方あるいは両方に意識され、管理の対象とされる。さらに、本稿で扱う中国漢民族 (HC)、韓国人 (KK)、そして日本人 (JP) とのネットワークは、インタビューから KC にとってそれぞれ異なる接触場面として意識されていることが明らかになった。接触場面の基本文献であるファン (2006)、Fan (1994) では、接触場面のタイポロジーとして、場面の使用言語と参加者の関係を基準とした相手言語接触場面、第3者言語接触場面、共通言語接触場面をあげており¹³、本稿でもこの分類を参考に、接触場面において報告されたコードスイッチングに見られる逸脱の留意、つまり KC がコードスイッチングを選択したり、あるいは選

択する可能性のある接触場面において、どのような接触性を認知していたかを分析する。

6.1. KC-HC ネットワークにおけるコードスイッチングの逸脱の留意

日本に居住する中国漢民族の多くは何らかの日本語能力を持っているため、KC は彼らとは中国語だけでなく日本語でもコミュニケーションを行うことが可能である。つまり、KC-HC ネットワークでは中国語と日本語のコードスイッチングが可能なわけである。以下、コードスイッチングに関して KC が留意した逸脱の特徴をまとめる。

(1) 中国語能力の不足に対する命題的な逸脱の留意

中国にいた頃から HC との間では中国語（普通話）が基底言語であったため、日本でも KC の多くは HC に中国語で話しかけることが自然であると報告している。同時に、KC の多くが中国語能力の不足を心配し、メッセージの生成に際して逸脱を留意していることも報告された。

KC8 が述べた例では、大学での研究上の先輩の HC にビデオで録画したデータの編集の仕方について説明しようとしたが、その場には日本人もいたと言う。彼女は技術的な用語の中国語がわからないため、中国語と日本語の切り替えを繰り返さなければならなかった。彼女は困惑したが、それは先輩の HC には自分の中国語能力の不足を示し、日本人の先輩には頻繁な切り替えによって奇妙な印象を与えてしまったと思ったからであった。KC8 の切り替えは、自分の中国語能力の不足を命題に関する逸脱として留意したために調整されたコミュニケーション方略としてのコードスイッチングであったと考えられる。

(2) HC が日本語へのコードスイッチングを好まないことに対する自己表示の逸脱の留意

多くの KC は、日本に住む限り、他の外国人も含めて、日本語を使うことが自然であると述べている。しかし、友人の HC の中には日本語への切り替えを好まない人がおり、いらいらすることがあると報告している。たとえば、KC7 は日本語能力がとても高い友人の HC でも中国語しか話さないことを逸脱として留意したことを報告している。KC7 によれば、ある時旅行の話をしていたが、その友人は地名の「宮城」などは日本語で発音したが、その他の日本語の地名も含めて、基本的に中国語しか話さなかったと言う。こうした HC の言語選択の傾向に対して、KC は HC が中国にいるときと同じように自己を表示しようとすることを逸脱として留意したと解釈することができる。

(3) HC のことば遣いに対する自己表示の逸脱の留意

上のような逸脱の留意は日本社会に居住して初めて生じた言語意識であると思われるが、HC のことば使いが日本に住んでいる間是不適切であると認知された際にも、コードスイッチングが語用論的に使用される例が見られた。KC2 は、後輩の HC と中国語で話をしていたとき、後輩のことば使いや先輩に対する態度を、朝鮮語の社会言語規範からみて不適切だと留意し、そのことを後輩に気づかせるために、わざわざ日本語に切り替えたと言った。つまり、KC2 は後輩の HC のことば使いによって表される人間関係のあり方を自己表示の逸脱として留意したと言える。中国場面であればこうした逸脱を留意することはなかったと考

えられるため、KC2が朝鮮語の社会言語学的規範を適用した背景には、HCとの場면을中国場面とは異なる接触場面であると認知していたことが関連していると解釈できるであろう。

(4) “we-code”としての中国語の使用に対する社会的な逸脱の留意

KC1は、大学で、ある学生のHCに日本語で話しかけ、中国語使用を避けたことを報告している。中国語を回避したことについて、KC1は相手がHCであったことを要因の一つとして示唆した。この事例は、第5節のKC-KCネットワークで朝鮮語を選択せず、中国語または日本語を使用した事例と似ているが、異なる面がある。KC1は相手を個人というよりも中国漢民族としてとらえており、中国語使用がHCとの間で“we-code”として働いてしまうことを事前に逸脱として留意したのではないかと考えられる。もしこの観察が正しいとするなら、中国においてHCと中国語でコミュニケーションをとっていた場面とは明らかに異なる言語意識が働いていたことになる。つまり、中国ではKCは少数民族として漢民族に対して中国語で対応していたわけであるが、日本に居住するHCと中国語を使う場合には中国人同胞としての機能が強調されてしまい、KCはそれを社会的な逸脱として留意したと思われる。

6.2. KC-KK ネットワークにおけるコードスイッチングの逸脱の留意

Fan (1994)、ファン (2006) の接触場面の類型において、KC-KK ネットワークは共通言語接触場面と呼ばれる。このネットワークにおいては、互いに社会言語学的規範、社会文化的規範を共有していないにもかかわらず、KCは母語である朝鮮語で、KKもまた母語である韓国語でコミュニケーションを取ることが可能である。以下、コードスイッチングに関する逸脱の留意をまとめる。

(1) 中国語へのコードスイッチングに対する自己表示的な逸脱の留意

韓国語を話すKKとのコミュニケーションにおいて、KCは韓国語、朝鮮語、日本語のいずれかを基底規範として採用することが可能であるが、中国語は不適切であると理解している。にもかかわらず、KCはときどきKKを同じ朝鮮族と見なしてしまうことがあり、その結果、無意識に内的場面の規範から中国語への切り替えを行ってしまう場合があると言う。例えば、KC8は、中国で親戚の韓国人が訪ねてきた時、その親戚の子供について中国語を使ってしまったことがあると報告している。これはKCが「親密さ」のあまり親戚の韓国人の子供との会話を内的場面として見なし、自己表示的な規範によって中国語に切り替えてしまったと考えられる。KC8はこのコードスイッチングの後に不適切な使用であったことを留意したと述べている。日本場面での具体的な事例は報告されなかったが、何人からのKCから同様のことはありうると報告された。

(2) 共通言語接触場面の潜在的可能性に対する自己表示的な逸脱の留意

KCとKKとは、それぞれ自分の母語を使用する共通言語接触場面を形成することが可能である。しかしながら、多くのKCはこのコミュニケーション上の有利な場面選択を望まず、両者にとって第3者言語である日本語を選択することを優先していた。

KC5 は、日本にある韓国系企業に職探しで電話をかけ、電話の相手が KK であることがわかったにもかかわらず、日本語で話すことを選択した。KC5 によると、日本に住む KK との関係を、朝鮮語あるいは韓国語の敬語体系を使ってコントロールすることは難しいと述べている¹⁴。また、KC6 は、スーパーマーケットのアルバイトをしているときに、客の KK に質問されたが、応答を簡単にするために自分を中国人として見せ、日本語で応答したという。

この 2 つの事例からわかることは、KC-KK ネットワークにおいて、朝鮮語や韓国語を使うことは、第 3 国である日本に住んでいるために不安定な人間関係につながってしまうということである。言い換えると、朝鮮語、韓国語を使用することによって共通言語接触場面を形成する潜在的可能性が、人間関係の自己表示に関わる逸脱として留意されたと言えよう。

(3) 朝鮮語と韓国語の言語的序列に対する社会的な逸脱の留意

大抵の KC は中国に住んでいた時からメディアを通じて朝鮮語のバラエティと韓国の文化についてある程度の知識を持っていたと言う。一方で、彼らは、韓国人がどの程度まで朝鮮語と朝鮮族の文化や生活について知っているのかについて不確かであると述べた。

例えば、KC7 は彼女の韓国語の誤用を友人の KK に笑われたことを不愉快に感じたと言った。また、KC8 は KK とのネットワークを作ることに熱心ではないが、それは韓国語のアクセントや語彙選択を管理するのに気をつけなければならないからだと答えている。言い換えると、朝鮮語と韓国語の知識の共有のされ方において序列が発生しており、KC は朝鮮語が劣位、韓国語が優位であると認知していることになる。KC は KK とのネットワークにおいてこうした序列が表層化されることによって、言語的序列に投影された社会的な逸脱を留意したと考えることができる。同時に、朝鮮語話者として、韓国語に適応しなければならないこともまた、ここでは逸脱として留意されていた。

(4) KC と KK の社会的序列に対する社会的な逸脱の留意

日本に住む KK とのネットワークにおいて朝鮮語ではなく韓国語を優先させる KC の言語選択を見ると、単に言語の序列だけでなく、それぞれが帰属する共同体の社会的序列の中での KK に対する KC の相対的な劣位もまた、社会的な逸脱として留意されている可能性がある。

例えば、KC7 によれば、友人の KK 2 人と電話で話すときには韓国語か日本語を選択すると言う。朝鮮語を優先しないのは、友人の KK との間で朝鮮語を使用すると、自分が中国の朝鮮族コミュニティ出身であることを意識させられるからだと言っている。ここには自分の出自をできるだけ表示しないという、コードスイッチングによる KC のアイデンティティの管理が行われていると考えられる。

6.3. KC-JP ネットワークにおけるコードスイッチングの逸脱の留意

上記 2 種類のネットワークと異なり、KC-JP ネットワークでは日本語だけが共有言語であり、基底の言語コードとして選択されざるをえない。以下、コードスイッチングについては 2 点をまとめる。

(1) コードスイッチングの不在に対して逸脱を留意しない

KC-JP ネットワークでは共有言語が日本語しかなく、コードスイッチングが行われたという報告はなかった。HC とのコミュニケーションにおいては、コードスイッチングが生じにくいことを逸脱として留意した KC であったが、JP とのネットワークにおいてはそうした報告は1つもなかった。つまり、KC-KC ネットワークの内的場面に見られたコードスイッチングの規範は、KC-JP の接触場面においては潜在化していると考えられる。

(2) 朝鮮語の文法外の規範の転移に対する語用論的な逸脱の留意

KC の報告によると、JP とのコミュニケーションは日本語の規範のみに基づいて行っていたわけではなかった。使用言語は日本語であったが、KC はいつも日本語使用に気を付けていなければならなかった。なぜなら朝鮮語の社会言語学的規範を無意識に適用してしまい、コミュニケーションの問題を引き起こしてしまうことがあるからである。

例えば、KC6 が報告した事例では、KC6 はアルバイト先の同僚の JP を怒らせてしまったという。その同僚はいつも汚れた人形のストラップをつけた携帯電話を持っており、ある時、KC6 は冗談の調子で「あの子（人形のこと）、きたなくてかわいそうだから、たまには洗ってあげたら」と言ったという。この冗談の言い方は朝鮮語の社会言語学的規範によるものであり、明らかに JP が面白がることはなかった。

KC7 もまた朝鮮語では直接に好き嫌いを表現してもかまわないと述べていた。しかし、同じような調子で日本語で「こういう人嫌い」とか「絶対友達になれない」と言うと、日本人の友達に「いやでも、嫌いという言葉はやめたほうがいい」と注意されることを理解していた。彼女は日本語で話すときには柔らかい言い方をするようにしているが、時には失敗して、気まずいことになってしまうと言う。

以上の2つの事例から明らかなことは、狭い意味での言語使用という点ではコードスイッチングは起きていなかったが、社会言語学的、または社会文化的な規範の転移は起こっており、それを KC は逸脱として留意しているということである。KC にとって、JP とのコミュニケーションを行う場面は、相手 JP の言語を選択する相手言語接触場面を形成しており、そのために朝鮮語の文法外の規範の転移から派生した語用論的な逸脱が留意され、管理の対象となっていると言える。

最終章では、6 節で見てきた接触場面におけるコードスイッチングの管理を含めて、多言語使用者としての KC の言語使用・言語選択の特徴をまとめ、考察する。

7. まとめと考察

Heller (1988) は「コードスイッチングは多言語社会における言語使用の経済とその社会のメンバーである個人の言語レパートリーとの2つの文脈に置かれるときにもっともよく理解できる」と述べている(Heller 1988:1)。朝鮮族のような多言語使用者にとってコードスイッチングは、

インタラクシヨンの内的規範（KCの言語使用の規範の一部であり、言語機能を実現するためのリソースの1つである）に基づく言語の使用そのものであると言えよう。ただし、管理がないとされる多言語使用者の内的場面でも、コミュニケーションの状況によっては、その場のコミュニケーション問題を調整する管理としてコードスイッチングを使用することがある。

一方で、彼らが居住する日本社会は多言語環境と言うには規模が小さく、ネットワークを形成している KC 以外の HC、KK、JP もまた単言語使用をコミュニケーションの規範としている場合が少なくない。そのため、内的場面で適切な言語使用と考えられるコードスイッチングは、彼らとのネットワークにおいて管理の対象となっている。

こうしたネットワークにおいては、接触する相手の言語選択や場面性が強く考慮されるため、KC 同士の会話場面では見られなかった、その場の接触性を考慮した規範、いわゆる接触規範（Fairbrother 2000, Neustupný 1985）が新たに生成され、接触場面の規範として適用される。例えば、KC 以外の言語話者とのコミュニケーションでは、コードスイッチングを行わないように KC 自身の言語使用を管理していることが報告されており、その時の言語管理は、接触規範に基づくものである可能性が考えられる。

さらには、接触規範を適用するだけではなく、KC の内的規範に基づく自己管理、または相手の言語使用に対する他者管理もしばしば観察される。例えば、KC はこれらの接触場面、とくに HC との場面において、多言語使用の内的規範に基づき、コードスイッチングを使用しない相手の単言語使用を逸脱として留意していることが報告されている。また、KC が自身の言語使用の問題を内的規範に基づき逸脱として留意し、その調整としてコードスイッチングを行っていることも観察される。

一方で、KC と KK の接触場面では、共通言語の使用が優先されるよりも、マイノリティ話者としての KC 自身の言語使用やアイデンティティを守るための管理が優先されると言える。例えば、本調査では KC が朝鮮語の使用を回避する管理を行っている例が観察されているが、それは、置かれた場面が、互いの言語だけでコミュニケーションが可能な共通言語接触場面であるにもかかわらず、相手の一方的な言語規範の適用により、不本意に相手言語接触場面になってしまうことや、その際相手の言語規範に合わせた言語使用がうまくできないことを逸脱として留意したための回避であると考えられる。このようなことから、KC のような多言語使用者は、共通言語接触場면을積極的に利用するための管理だけではなく、時には相手とのコミュニケーション場面が共通言語接触場面として捉えられることを回避し、あえて接触性が強調される第3者言語接触場面にすることで、相手とのコミュニケーションを優位にする、もしくは同等なものにするための管理も行っていることが伺える。

以上の考察から、日本に居住する朝鮮族のコードスイッチングに見られる言語使用・言語選択は、彼らが参加する場面をどのような場面（内的場面、相手言語接触場面、第3者言語接触場面、共通言語接触場面）として捉えるかによって異なると言える。またそこには、場面を考慮したコミュニケーション規範の選択や調整が現れており、コードスイッチングは

その過程に見られる言語管理の1つであると言える。

このように多言語使用者のコードスイッチングに関する研究は、様々な言語背景を持つ多言語使用者の言語使用の実態を捉えるための手掛かりになるだけではなく、グローバル化しつつある社会において多様化する接触場面のあり方や言語管理の様相を明らかにする上でも示唆できる点が多いと言える。

(謝辞：本稿を修正するにあたり、査読者から資料提供も含めて貴重なご助言をいただいた。ここに感謝の意を表したい。ただしすべての文責は執筆者兩名にあることはもちろんである。)

注

- 1) 日本に居住する中国朝鮮族の正確な数は、民族ごとの登録がないため現実的には明らかではない。東北3省の出身として登録している日本居住者は2001年で10万6913人である(権・宮島等2006:181)。
- 2) 本稿でいう朝鮮語は、中国に居住する朝鮮族の間で使用される朝鮮語の変種を指す。
- 3) ただし、1980年代前半に行われた「朝鮮語和漢語関係調査」によると、朝鮮族「雑居地区」(延辺朝鮮族自治州、長白朝鮮族自治県、および各地の朝鮮族自治郷・自治村を除く東北3省内の諸地域)では、朝鮮語を常用する者は、およそ3割から4割しかいないとされており、すべての中国朝鮮族の人が朝鮮語を第1言語とするという一般化はできないと思われる。
- 4) 正確には中国朝鮮族コミュニティで使用される中国語の変種があると思われるが、中国語のさまざまな変種の微妙な相違については本稿の主題を越えているため、割愛する。
- 5) 中国人民共和国国家統計局の「2005年全国1%人口抽樣調査」(2005年全国1%人口抽樣調査資料(2007))によると、漢族人口は11億8295万人で、総人口の90.56%とされている。また、少数民族人口は1億2333万人で、総人口の9.44%とされている。
- 6) 中国人民共和国国家統計局の「2005年全国1%人口抽樣調査」では、朝鮮族人口は1,923,842人としている。そのうち、大半は東北三省に集中している。しかし、最近においては、延辺地域からの韓国や日本などへの人口流出が進行しており、日本における中国朝鮮族の増加もこのような傾向を反映しているといえよう。
- 7) 言語管理理論についての基本文献は入手が困難かもしれないが、例えば、『新版日本語教育事典』の「言語問題と言語管理」(2005:522)などは参考になる。
- 8) 『新版日本語教育事典』の「コミュニケーション場面の種類」の定義(2005:502)によると、コミュニケーション場面は、言語と文化の観点から、「内的場面」と「外的場面」の2つに分けられるという。「内的場面」は、「母語場面」とも呼ばれ、同じ言語、文化を共有する母語話者同士のコミュニケーション場面を指す。一方、「外的場面」は、言

語と文化が異なる参加者が接触する場面を指し、異文化が接触する場面であることから、「接触場面」と呼ばれることが多い。中でも、「母語話者」と「非母語話者」によるコミュニケーション場面は、もっとも典型的な「接触場面」とされている。「接触場面」の概念や種類に関する詳細は、ファン（2006）、Fan（1994）を参照されたい。

- 9) 全（2007）も、延辺自治州での中国朝鮮族と韓国人の道聞き場면을調査しながら、間接的ではあるけれど、中国朝鮮族の言語選択の複雑さに触れている。
- 10) インターアクション・インタビューでは、できるだけ言語使用を含め、具体的な言語行動を報告してもらえよう依頼しているが、調査方法の特徴上、会話データ収集のような具体的な言語データを収集するには限界がある。
- 11) 「韓国語」は、韓国で使用される朝鮮語の変種の一つで、本稿では韓国の正式な名称に従い「韓国語」と表記する。
- 12) こうした場面や話題ごとのコードスイッチングからは中国における朝鮮族が置かれているダイグロシアの言語環境が推測されるが、本調査では確認には至らなかった。
- 13) Fan（1994）によれば、場面の基底規範が参加者の一方の母語である場合を相手言語接触場面（partner language contact situation）、参加者どちらにとっても第3言語である場合を第3者言語接触場面（third party language contact situation）、そして言語コードは類似しているが、社会言語学的ないし社会文化的な言語レパートリーが異なる場合を共通言語接触場面（cognate language contact situation）と呼ぶ。
- 14) KC5が理由として述べた敬語体系のコントロールの困難さが本当の理由であったかどうかについては明らかではない。

参考文献

- 大原始子（2004）「アイデンティティの多層性と言語の選択・切り替え」小野原・大原子子編『言葉とアイデンティティ』三元社 99-126
- 金明姫（2004）「日本における中国朝鮮族の言語生活と意識：在日中国朝鮮族就学生・留学生・社会人の事例として」『人間科学研究』11巻2号 神戸大学大学院文化人間科学科 65-93
- 金珍淑（2006）『朝・中・日3言語併用者のコードスイッチング：日本在住朝鮮族の言語運用に注目して』未刊行修士論文 お茶の水大学大学院人文科学科
- 高民定・村岡英裕・石田由美子・S. K. ファン（2007）「日本における多言語使用者の言語管理と日本語教育」『2007年度日本語教育学会春季大会予稿集』317-328
- 国家統計局人口和就業統計司等編（2007）『2005年全国1%人口抽樣調査資料』中国統計出版社
- 權香淑・宮島美化他（2006）「在日本中国朝鮮族実態調査に関する報告」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所 223-237

- 真田信二・庄司博史 (2005) 『日本の多言語社会』 岩波書店
- 全永男 (2007) 「対韓国人談話場面における延迎朝鮮族の言語行動」『社会言語科学』9巻2号 41-52
- ナカミズ・エレン (2003) 「移住家族と二言語使用：ブラジル人若年層によるコード切り替えの諸機能」『桜美林シナジー』1号 桜美林大学 39-50
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』 大修館書店
- ネウストプニー, J. V. (1997) 「プロセスとしての習得の研究」『阪大日本語研究』9号 大阪大学大学院文学研究科 1-15
- ファン, S. K. (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈』アルク 120-141
- 朴光星 (2006) 「中国朝鮮族：社会変化とジェンダー」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所 139-152
- 村岡英裕 (2002) 「質問調査：インタビューとアンケート」J.V. ネウストプニー・宮崎里司編『言語研究の方法』くろしお出版 125-141
- 吉田さち (2005) 「二言語の能力とコード・スイッチング：韓国系民族学校の高校生を対象に」『社会言語科学』8巻1号 43-56
- Auer, J.C.P. (2000) A conversation analytic approach to code-switching and transfer. In Wei, Li. (ed.), *The bilingual reader*, 261-279. London: Routledge.
- Baker, C. (1993) *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Fan, S.K. (1994) Contact situations and language management. *Multilingua*, 13-2, 237-252.
- Fairbrother, L. (2000) Analysis of intercultural interaction management within a party situation. *社会言語科学*, 2-2, 33-42.
- Gumperz, J. J. (1982) *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hoffman, C. (1991) *An introduction to bilingualism*. New York: Longman.
- Hymes, D. (1972) Models of the interaction of language and social life. In J.J.Gumperz and D.Hymes, eds, *Disrections in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, 35-71. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Myers-Scotton, C. (1997) Code-switching. In F.Coulmas (ed.), *The Handbook of Sociolinguistics*, Blackwell Publishers, Ch13, 217-237.
- Neustupný, J.V. (2005) Foreigners and the Japanese in contact situations: evaluation of norm deviations. *International Journal of the Society of Language*, 175-176, 307-323.
- Neustupný, J.V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and J. Kwan-Terry (eds.) *English and Language Planning: A Southeast*

- Asian Contribution*, Singapore: Academic Press. 50-69
- Neustupný, J.V. (1985) Language norms in Australian-Japanese contact situations. In M.Clyne (ed.), *Australia Meeting Place of Language*, 161-170. Canberra: Pacific Linguistics.
- Nishimura, M. (1997) *Japanese/English code-switching: Syntax and pragmatics*. New York: Peter Lang.
- Singh, R., & Backus, A. (2000) Bilingual proficiency and code-switching/mixing patterns. In R. Singh (ed.), *The yearbook of South Asian language and linguistic*. New Delhi: Sage.
- 崔奉春 编 (1994) 「(四) 我国朝鲜族的双语状况」『朝鲜语和汉语关系调查』53-63 延边大学出版社

(千葉大学)

Management of Multilingual Use of Korean-Chinese Residents in Japan: An analysis of noted deviations in code-switching

KO Minjoeng · MURAOKA Hidehiro

【Keywords】 multi-language user, code-switching, network, language management, contact situations

Many Chinese with Korean ethnic background (KC hereafter) in Japan speak a variety of the Korean language known as Chinese Korean, Mandarin and Japanese. This paper attempts to reveal the actual language use among KC as a multi-language user in Japan, by focusing on their management of code-selection and code-switching. It is important to find that while there are functional uses in code-switching reported in KC-KC network (when interacting with fellow KC), in the following three types of communication network, the KC-HC network (when interacting with ethnic Han-Chinese), the KC-KK network (when interacting with Korean speaking south Koreans), and the KC-JP network (when interacting with Japanese), KC's notings of deviations in code-switching are clearly reported. The paper concludes that the different types of notings and management of code-switching among KC are reflections of how they perceive different types of situation concerned.

(Chiba University)